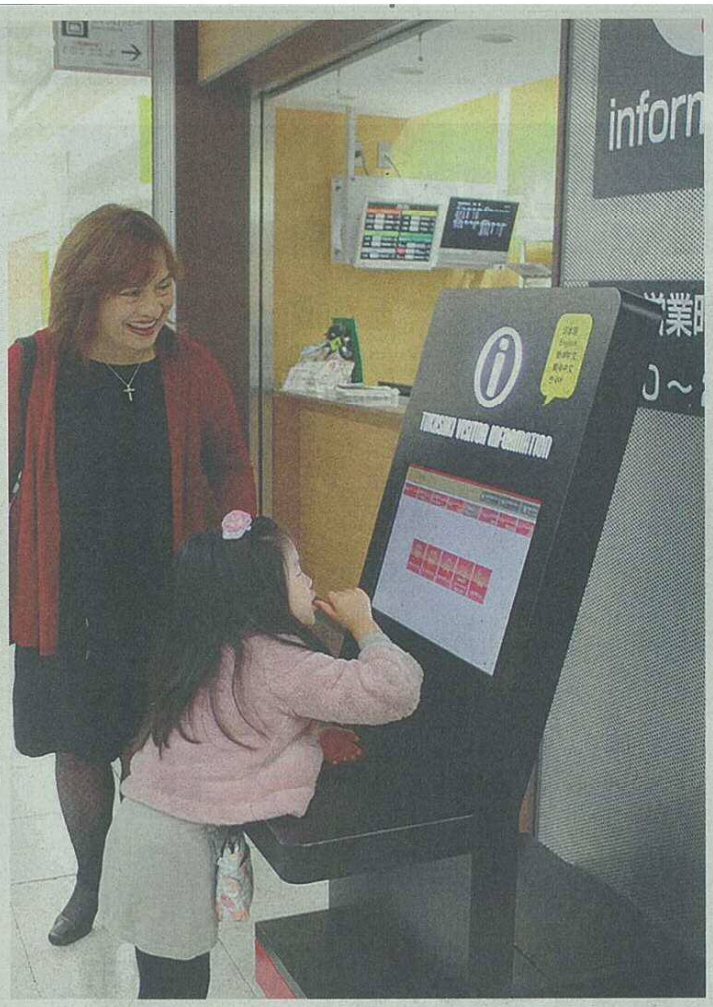
「観光大使」多彩な顔ぶれ

北関東の底力 ―④―

高崎発 市民みんなで「おもてなし」



高崎駅に設置されたタッチパネル式の観光情報案内板。英語や中国語、韓国語にも対応できる。左は、井上ティナさん＝高崎市で

「天日干しでゆっくり乾燥するせいか、お米が甘く感じます」

介護士の上野和泉さん(三七)は昨年十月、インターネットの地域情報サイト「ぐるたび」に投稿し、地元の高崎市倉渕町で作られる「はんでえ米」を紹介した。

結婚して五年前に引っ越してきた。「お米がおいしい」と感じた。稲の天日干しと、山地特有の寒暖差で育まれるうま味と粘りが特長という。

「倉渕は水、野菜もおいしい。そんな魅力を知ってほしい」と市が昨夏始めたプロジェクト「市民みんなが観光大使」に手を挙げた。

小学生と保育園児の子ども三人を抱え、母親目線でコメントも書き込む。

観光大使になって「住んでいるところをよく知らないと、おもてなしはできないと感じた。もっと勉強したい」と自分なりに使命感も芽生えたという。

◇

インターネットで「高崎発」の情報発信を担う市認定の観光大使は八百三十人。その顔触れは多彩だ。

ラジオ局勤務の井上ティナさん(五三)は台湾出身で高崎に住んで二十八年目。JR高崎駅に昨秋設置されたタッチパネル式の観光情報案内板にも、井上さんら市内在住の外国人の助言が生かされている。「高崎は第二のふるさと。困っている人がいたら、通訳などで役に立ちたい」と外国人のおもてなしに積極的だ。

国府地域の伝統野菜「国分にんじん」など地元の話題を中心に投稿しているのは、老舗食堂の五代目店主松岡秀樹さん(四七)。国分にんじんをペーストにして練り込んだうどん作りにも挑戦するという。

「情報を発信して、知ってもらうことがおもてなしの一歩」と大使に応募した。

ITコンサルタント奥田美和さん(三九)は夫の転勤で引っ越しが多く、昨年から埼玉県本庄市。「大宮に行くより近い」と高崎をよく訪れる。夫が転勤族の妻たちのネットワーク「転妻(てんさい)広報大使」も主宰し、最近は「チーム群馬」を立ち上げた。「知名度は低いが、高崎のブームはこれから。気合を入れて応援する」と意欲的だ。

陶器メーカーの東京勤務が長かった高崎市在住の松田勉さん(六二)は、外食産業も詳しい。「観光客のリピーターを増やすには『これぞ上州』という独自性が必要。東京にない面白い店を掘り起こしたい」とご当地グルメの発信にもこだわりをみせる。

春は北陸新幹線の金沢延伸、二〇二〇年には東京五輪を控え、観光客の増加が予想される。市観光課は「高崎の隠れた魅力を発信していただきたい」と観光大使の役割に期待する。

(大沢令)

市民みんなが観光大使 高崎市が昨年始めたプロジェクト。500人を公募し、応募した全員が「高崎観光大使」に認定された。外国人のほか、県外組もいる。パソコンや携帯端末からインターネットの地域情報サイト「ぐるたび」に月1回以上、おすすめスポットや路地裏の名店など市内の魅力を投稿する。

おくやみ

〈通〉通夜〈式〉告別式〈自〉自宅〈喪〉喪主

前橋市 須田貞夫氏 1(90歳〈式〉5日午後2時、下沖日典ラサ赤城野。家族葬〈自〉町〈喪〉長男・実氏▼穂積直氏日、96歳〈通〉6日午後6時、田町、アモート若宮〈式〉7日11時、同〈自〉昭和町〈喪〉長男氏▼藤田ヤスさん 2日、1歳〈式〉5日正午、天川大島町国社ビクシー館。家族葬〈自〉町〈喪〉長女・幸江さん▼石田寿氏 2日、86歳〈通〉6日午時、富士見町田島、セレモニール富士見聖苑〈式〉7日午時、同〈自〉同町石井〈喪〉石田代表で長男・広司氏▼高橋清2日、90歳〈通〉6日午後6時代田町、アモート若宮〈式〉7午、同〈自〉上小出町〈喪〉長男紀氏▼若林幹雄氏〈群馬ユニ

四方 美砂子さん(上・みさこ＝群馬銀行会長方浩氏の妻) 12月29日、気のため死去、66歳。高市出身。葬儀・告別式は日午後1時から、前橋市川大島町1035の7、橋メモリードホール。自は前橋市紅雲町。喪主は(ひろし)氏。